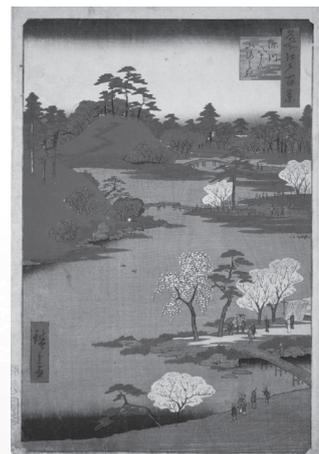


江戸東京 土木遺産

公園

一口に「公園」といっても国立公園から都市公園まで、その分類、機能的特徴は多岐にわたる。しかし、豊かな自然環境を保全、育成しながら、人々が潤いのある緑豊かな空間に憩い、交流する場であることに変わりはない。今回は江戸期を発祥とし、現代に受け継がれた公園にスポットを当てる。

「公園」とは明治期に入って生まれた都市空間の1つを指す概念だ。1873(明治6)年、明治政府が通達した太政官布告によって公園のあり方が定められた。上野公園をはじめとして選定された5公園は、江戸時代の武家屋敷や寺社に所属する緑豊かな遺産を引き継いだものだった。1823(大正12)年の関東大震災以降は、都市部における火災の延焼を食い止めるという機能が付与される。昭和に入り戦後復興に伴う都市計画における公園には子供たちに健全な遊び場を提供するという明確な目的意識があった。その後、現在に至っては大規模な行楽地の開発もあり、都市公園は「遊び場」というより「憩いの場」としての存在意義が強くなったといわれる。それでも、今回訪れた2つの公園をはじめ、東京の公園には子供たちの歓声が響き、親子連れが遊具で楽しむ姿が日常的な風景になっている。



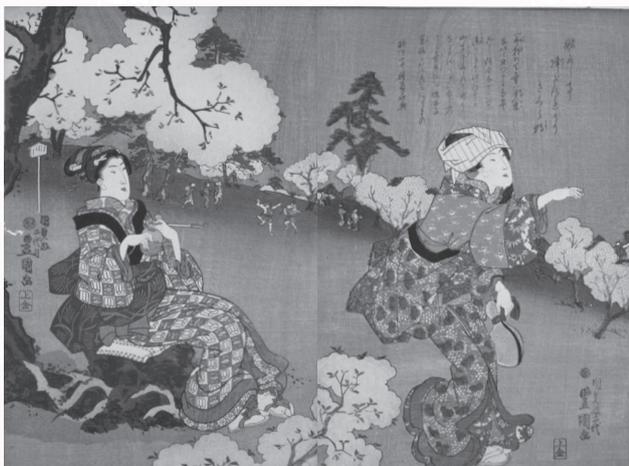
太政官布告で選定された公園の1つである深川公園
歌川広重「深川八まん山ひらき」(所蔵: 国立国会図書館)

飛鳥山公園

将軍が開いた江戸時代から続く桜の名所

江戸っ子に開かれた行楽の場

北区の「飛鳥山公園」は明治政府より上野、深川、浅草、芝とともに前述した5公園のひとつに定められた由緒ある公園だ。中世まではこの一帯を支配する豪族豊島氏の軍事拠点で、茫漠とした雑木林が広がっていたが、江戸期に入り享保の改革に伴い徳川吉宗によって行楽の場として整備された。当時、花見といえば上野の山のみ、しかも寛永寺の境内だったこともあり夕刻には門を閉ざしてしまう。吉宗は広尾、向島の隅田川沿いと合わせてここ飛鳥山にも桜を植樹、江戸っ子たちの行楽の場として解放した。それまでご法度とされていた酒宴や仮装も容認され、江戸庶民はそれぞれ趣向を凝らして花見を堪能したという。八代将軍吉宗、太っ腹ではないか。



江戸時代の人々の花見を楽しむ姿が思い浮かぶ
歌川国貞「飛鳥山」(所蔵: 国立国会図書館)

文：植田 波留基



今でも桜の時機には大勢の人で賑わう



明治通り、複数の線路に隣接しているがそれらに引けをとらないスケールの飛鳥山公園

300年前のどんちゃん騒ぎが聞こえる!?

この地を治めていた豊島氏は熊野信仰に厚く、紀州熊野から若一王子神社を勧請していた。この神社の名が王子の地名の由来だと言われている。1716(享保元)年、吉宗が将軍となり出身地である紀州より日光御成道(岩城道)を江戸に上がる際この地に差し掛かり、紀州にちなむ地名を耳にしたことから目をかけるようになった。吉宗は視察と称して度々この地を訪れては鷹狩りに興じたという。

吉宗は役人を差し向け、渓谷や川を浚って導水工事を行った。工事は数千人もの労働力を投入し2年間にわたって展開された。その結果、蛇行する川の流れや滝や渓谷が豊かな表情を見せるようになる。さらに数千本の桜を植えたことにより、飛鳥山は江戸有数の桜の名所、行楽地となった。江戸から2里(8km)の飛鳥山は日帰り遊山にはいささかきつい距離にあったが、それでも多くの庶民が押し寄せた。吉宗自身も1733(享保18)年に、家来や大奥の女性を伴い桜が満開の飛鳥山を訪ねている。一行は歌を詠み花見に興じ、あるいは少々羽目を外したイベントになったとする記録も残っている。当時

の切絵図をみるとその地図には飛鳥山に桜が描かれ、「此所ヨリ筑波山見ユ」と記されている。周囲に「此辺料理屋多シ」「茶屋多シ」「扇屋」「海老屋」といった記載があり、当時の賑やかな街並みが偲ばれる。

明治期には実業家渋沢栄一が飛鳥山に居を構える。1901(明治34)年から約30年間、晩年をこの地で過ごした。その間、国内外の要人、文化人が訪れ、近代化の真っ只中にあった王子は情報発信基地、国際的な社交場となっていた。1873(明治6)年に石神井川の豊かな水量に目をつけ、後の王子製紙となる製紙会社を設立、日本の製紙産業の礎を築いている。

昭和に入り戦争の足音が近づくにつれ多くの桜が切り倒され国威発揚、体力向上を目的に運動場として整備され、様変わりしたエリアもある。しかし、幾多の変遷を経ながら現在でも豊かな緑に覆われた市民の憩いの場だ。お城や象を模した遊具に集まる子供たちの歓声の向こうからは、300年前の江戸っ子たちのどんちゃん騒ぎが聞こえてくるようだった。

戸山公園（高田馬場）

弓馬訓練場の名残が伝承されている公園



毎年体育の日に戸山公園で行われる流鏝馬神事(撮影：2012年／提供：やぶなび)

尾張徳川家下屋敷の回遊庭園

疾走する馬上から矢的を射る「流鏝馬」。この伝統的な射技で有名な公園がある。新宿区の戸山公園だ。流鏝馬は平安時代から鎌倉時代にかけて盛んに開催されていたが、8代将軍吉宗が世継ぎの疱瘡平癒を祈願して穴八幡神社で奉納した神事が「高田馬場の流鏝馬」だ。もともとこの地は旗本の馬揃え(閲兵式)や馬術、弓術の訓練場があり、馬場の地名もここに由来する。吉宗の奉納流鏝馬は明治以降廃止となったが、1934(昭和9)年に復活、1988(昭和63)年に新宿区の無形民俗文化財に指定された。現在は、毎年体育の日に都立戸山公園の箱根山地区で一般に披露されている。

その戸山公園の発祥は、1668(寛文8)年に建てられた尾張2代藩主徳川光友の下屋敷だ。



弓術や馬術の練習に励む武士
歌川広重「高田の馬場」(所蔵：国立国会図書館)

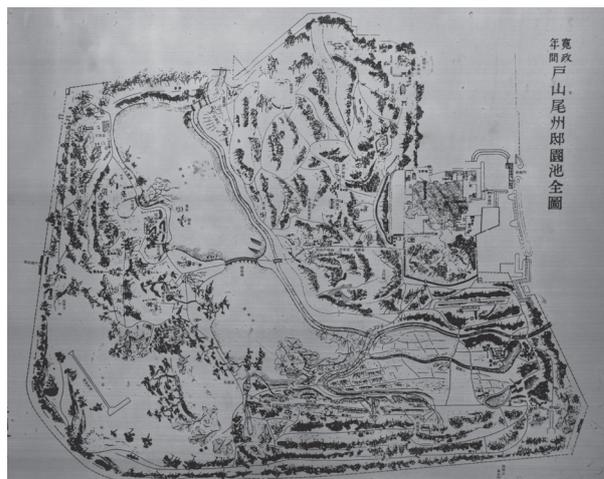
総面積約13万6千坪あまりの壮大なもので、後に「戸山荘」と呼ばれるようになる。戸山荘の造営は1669(寛文9)年に着工、回遊式築山泉水庭園として20年後の元禄年間に完成した。

敷地内には当時から名所として名を馳せていた箱根の山に見立てた築山「玉円峰」や、東海道は小田原の宿場を模した街並み等二十五景が整備された。庭園の南端に御殿、敷地の中央には泉を掘り琥珀橋という木橋を架け、祠や茶屋を配した。園内はあたかも東海道五十三次を巡っているかのような風雅な景観を見せていたと言う。粋な殿様だ、徳川光友。

山手線の内側にそびえる最高峰「箱根山」

戸山荘はその後一時荒廃するが、寛政年間(1789年～)に入り、11代将軍家斉の来遊を機に再び息を吹き返す。将軍をして「すべての園池は、まさにこの荘を以て第一とすべし」と言わしめたという。しかし安政年間(1854年～)に災害に遭い、復旧する機を逸したまま明治維新を迎えることになる。その後、陸軍戸山学校をはじめとする軍用地、戦後に国有地となったこのエリアの一部が1954(昭和29)年に現在の公園として都民に解放された。唯一江戸期の面影を残す玉円峰は、由来の通り「箱根山」と呼ばれ戸山公園のシンボルになっている。

JR新大久保駅から東へ10分ほど歩くと公園の南側の入り口だ。歩を進めるにつれ大久保通りの喧騒が遠ざかっていく。鬱蒼とした木立の間から戸山ハイツのアパート群が覗く。戦後の住宅不足を背景に建設された、都内の団地のプロトタイプとも言える集合住宅だ。70年代に高層化が進んだが、どこか懐かしい風情が漂っている。幼稚園や多目的運動場が整備された園内には、子供たちのはしゃぎ声やジョギングを楽しむ人の姿がある。園の中央にあるのが高さ44.6mの箱根山だ。江戸期に泉を造成した際の残土をリサイクルして築かれたとも伝えられる。山というよりは「丘」だが、頂上を目指すと少々息が切れるほど急峻な築山だ。



11代将軍徳川家斉時代の戸山公園の地図

北側へ下山すると多目的広場に出る。その先は学習院女子大や早稲田大が点在する文教エリア。広場では測量の実習に精を出す学生や、家路を急ぐ若者、ベンチでくつろぐ人たちの姿が見られた。江戸時代以降、多くの人々の手によって拓かれた小山に、団地が、小学校が、幼稚園が築かれ、そこに恒常的な人の営みが連続と受け継がれていることに心を動かされる。

今回訪れた飛鳥山と戸山は、公園というよりは、すでに生活圈と一体となる豊かさがあつた。公園は物語を紡ぐ場でもある。誰もが、ガキ大将にいじめられたり、友達と取っ組み合いを繰り広げたりした公園の原風景を持っているはずだ。公園はこの先もずっと、訪れた人が数々の思い出を刻む場であり続けるのだろう。



戸山公園内にある箱根山(提供:東京都)